

「イエスの怒り」

マルコ福音書1章35節-45節

「彼は、怒って、手をのぼしてその男にさわり、言う、「望む。清められよ」。そしてすぐに、癩はその男を離れ、その男は清められた。」(41, 42, 田川訳)

- 1、病む人の「いやし」への切望は大きい。三福音書を合わせると百十五ものイエスの病気のいやしの話が載っている。「夕暮れになると」(日が沈むまでは、ユダヤ社会の安息日律法の規則が治癒行為を禁止していた)。山形孝夫著「治癒神イエス」(小学館1981)によると、当時、悪霊つきや癩病は神から呪いをうけたものとして、人々から恐れされたい。イエスのいやしは、病人に強制されていた牢獄のように重い社会的意味づけからの解放のための行為であったと言う。
- 2、新共同訳聖書では「イエスが深く憐れんで」(1:41)と訳す。しかし、聖書学者は「イエスは憤って手をのぼし」(荒井献)「彼は、怒って」(田川建三)と訳す。写本の西方系は「怒り」。それ以外の系統は「憐れんで」となる。文脈からは、すぐ後に「厳しく注意して」「叱りとぼして」があるので、「怒り」の方が筋が通る。しかし、イエスには「憐れんで」の方がなじむので、写本家が書き替をえた。
- 3、なぜ「怒った」のか。規定を犯して、癩病人がこのこ出かけてくる事に対して怒った、と田川は言う。古代人は癩病は恐ろしい伝染性のある病気だから患者と接するには非常に面倒な規定を多く作られ、接触を規制した(レビ記13章以下)。それによれば癩病患者の町中の歩行は禁止されていた。イエスは一見無神経な癩病患者に怒りをぶつけた。しかし、その彼の切実な、世間をもものとしめない気概に応えて「望む。清められよ。」(T)「よろしい。清くなれ」(S)と声をかけた。「たちまち癩病は去り清くなった」。そしてまず規定どおり祭司に見せよ。歩き回り、人に言い触らしたりするな、と叱り飛ばした。これが物語。これはこの男に対する、支えと励まし、生きることへの肯定の宣言である。イエスの怒りには、単にこの男の軽率な行動だけでなく、病人を差別して社会的負担で押しつぶしてゆく人間の社会に対する怒りも暗に込められていたであろうと想像をする。
- 4、イエスは一人の男に、怒ったり、叱り飛ばすほどに深く関られた。一人の人の悩みを自分の事とされた。逆に伝承を残した人々は、自分たちなりのイエス像を作って、民衆がともすると旧約律法を軽んじたので、そんな人たちに向けて、「イエス様だって律法を大事にしているんだぞー」という事を示したかった。イエスが旧約律法に忠実だという枠は、イエスの名を借りて作られた伝承の趣旨。そんな伝承にもかかわらず、一人の病人に関わる真実なイエスの振る舞いが滲んでいる。
- 5、マルコの編集の力点は、45節。沈黙を命じれば命じるほど、イエスの名が広がってゆく。無名な語り手こそ真の宣教者である。とはマルコの考え。自分の身に起った事を通して、イエスを広めてゆく。マルコは当時の教会に見られた高踏的な、教条的な、権威主義を批判し民衆の必死の姿にこそ、イエスの命が生きていることを主張した。火花が散るようなイエスとの出会いを大切にしたい。